

タイトル	アトラ・ハシース叙事詩 (Atra-hasis) (4)
著者	桑原, 俊一
引用	北海学園大学人文論集(46): 41-71
発行日	2010-07-30

アトラ・ハシース叙事詩 (Atra-hasis) (4)

桑 原 俊 一

キーワード：古代メソポタミアの神話，アトラ・ハシース叙事詩，創造神話，洪水神話

本稿はアトラ・ハシース叙事詩の翻字，翻訳とコメント等の継続である。従って使用した主たるテキスト記号やその他の記号はアトラ・ハシース叙事詩 (Atra-hasis) (1)を踏襲するものとする。

人間の数は夥しく多くなり，神々は人間の喧騒ゆえに忍耐できなくなる。疫病や旱魃，飢饉をもたせたが，知恵の神エア（エンキ）の策略を得て人類は生き延びる。ついに神々は人間絶滅の決定を下す。エンリルは洪水によって殲滅を図ろうとする。しかし，ここでもエア（エンキ）は神々の決定に背いてアトラ・ハシースに箱舟の建造を進言する。洪水物語はすでにシュメールの時代から知られていた¹。アトラ・ハシース叙事詩における洪水物語は出来事や叙述においてもほぼ 500 年後のギルガメシュ叙事詩に挿入された。もっともアトラ・ハシースはギルガメシュ叙事詩においてはウトゥナピシュティムとして登場する。

本稿では第 3 の書板を取り扱う。冒頭はエア（エンキ）がアトラ・ハシー

学術雑誌等略記記号は(1) *The Assyrian Dictionary of the University of Chicago*, ed. Martha T. Roth, et. at. (Chicago, the Oriental Institute, 2005); (2) W. von Soden's *Akkadisches Handwörterbuch*, (Otto Harrassowitz, 1966-1981); (3) R. Boger's *Handbuch der Keilschriftliteratur* vol. 1 (Berlin, 1967), 661-672.に準拠する。

1 M. Civil, "The Sumerian Flood Story," in Lambert/Millard ed., 138-145.

スに箱舟建造を細部にわたって指示する記述に始まる。アトラ・ハシースは家族を始め、地上の諸動物や鳥類を舟に乗せると、天候は急変して空が破られるかのように大雨が箱舟を襲う。この光景に接した女神ニントウ——人間を創造した——は悲嘆にくれる。7日7晩の間、洪水が大地を襲ったが箱舟は耐えて残った。エンリルはなぜアトラ・ハシースを始め人類は生き残ったのか、とエア（エンキ）に詰問する。あっさりエア（エンキ）はその策略をめぐらしたのは自分であると認める。ともあれ物語は終章へ向かう。人口過剰にどう対処すべきか、その手立てが叙述されていたと思われるが、テキストは欠損が多い。

アトラ・ハシース叙事詩における洪水物語がギルガメシュ叙事詩や聖書の洪水物語と比較して明瞭なのは、後者は前者を下敷きにしていることである。しかし物語の終章部分は大きく異なる。つまり洪水伝承に関連して最も興味あることがらは、第3の書板の結末部分、つまり第7欄に描写されている。それによれば、結局のところ人類は絶滅の危機から逃れることになるのだが、人口の増加に歯止めをかけることでエンリルと折り合いをつけたことが叙述されている。この部分の詳細を知りたいところではあるが残念ながらテキストの破損が大きく、どのような方法で人口増加に歯止めをかけたのか、部分的には推測できるにしても、結論を得ることは困難と言わなければならない。この問題は単に今日的意味での人口過剰を意味すると解すべきではない、確かに人口過剰問題はあったにせよ、他方で結果的に人間の寿命が短縮されたことを意味する。つまり神々の時代に近かった王たちの統治年代は数万年であったことを考慮すると、アトラ・ハシース叙事詩における洪水物語は人口を減少させるための方策に言及することで、いわゆる歴史時代の到来を告げているともいえる。

第3の書板

基本的テキストはCとする。ただし i 1-2 は BD とする。

第1欄

1 ¹Atramhasīs piaš īpšama

アトラ・ハシースは口を開いて、

2 izzakar ana bēlišu²

彼の主人に言った。

この後テキストCにおける10行ほどは欠損している。

C₂ 11 [¹Atramhasis] piaš ipšama

アトラ・ハシースは口を開いて、

12 [izzakar] ana bēlišu

彼の主人に言った。

C₂ 13 [ša šutti w]uddia qerebša

その夢の意味をわたしに教えてください³。

C₂ 14 [……]x-di luštê sibbassa

その前兆を探り出すことができますように。[]

C₂ 15 [Enki p]iašu ipušamma

[エンキ] は口を開き

C₂ 16 [iz] zakar ana ardišu

彼の僕に言った。

C₂ 17 [m]ašumma luštêi taqabbi

「『わたしは何を⁴ 探り出すべきでしょうか』とお前は言う。

C₂ 18 šipra ša agabbûku

わたしが伝えるお告げに

C₂ 19 šuṣṣir atta

注意を向けよ。

C₂ 20 igaru šitammianni

2 第2の書板からのキャッチライン。

3 エンリルは洪水によって人類を滅ぼそうと決意したが、エア（エンキ）といえどこの決定に反対することはできなかった。そこで彼はアトラ・ハシースに夢によってエンリルの決定を教示する方法を取ったのである。

4 Dalley は von Soden 1979, 32 に従い、「寝床で」と訳出する。

壁よ、私に聴け。

C₂ 21 kikišu šuṣṣiri kalâ zikrija

葦の壁よ、わたしのことば全てに注意を向けよ。

C₂ 22 ubbut bita bini eleppa

家を壊して、舟をつくれ。

C₂ 23 makkūra zērma C₂ 24 napišta bulliṭ

財産を捨て⁵て、 命を保て。

C₂ 25 [e]teppu ša tabannû[ši]

お前が造る舟は、

C₂ 26 [] mith[urat ()]

[] 等しく []

継続する2行はテキストの判読が困難である。

C₁ 28 [] x ur pa?ti x x[……]

[]

C₁ 29 [kī]ma apsi šuati šullilši

それにアプスーのように（屋根として）覆いをせよ。

C₁ 30 ajimur ʾšamaš qurebša

（そうすれば）シャマシュはその内を見ることはない。

C₁ 31 lū šullulat eliš u šapliš

その上と下に覆いをつけよ⁶。

C₁ 32 lū dunnunā uniātum

装備は強固でなければいけない。

C₁ 33 kupru lū dān emūqa šurši

アスファルトを強くせよ。（舟）に強度を与えるために。

C₁ 34 anāku ulliṣ ušaznanakku

5 原義は「憎む」。

6 エンキがアトラ・ハシースに命じて造らせた舟は方形の3階建構造をもつ。

わたしはその間にお前たちのうえに雨を降らせよう⁷。

- C₁ 35 hišbi iṣṣūri budduri nuni⁸
おびたらしい鳥と一籠の魚（とともに）。」
- C₁ 36 ipte martakta šuati ummali
彼は砂時計を開いて、それを満たした。
- C₁ 37 bā' abūbi 7 mūšišu iqbišu
彼（エンキ）は彼（アトラ・ハシース）に告げた。
七夜の間に洪水が圧倒することを。
- C₁ 38 ¹Atramhasīs iqbia tērtam
アトラ・ハシースは指令を受けた。
- C₁ 39 šibuta upahhir ana bābišu
彼は彼の門に長老たちを集めた。
- C₁ 40 ¹Atramhasīs piasu ipišum[a]
アトラ・ハシースは口を開き、
- C₁ 41 [i]zzakar ana šibuti
長老たちに言った。
- C₁ 42 [it]ti iliknu ili ul magir
「わたしの神はあなたたちの神を気に入っていない⁹。
- C₁ 43 [i]tetezzizū ^dEnki u ^dEnlil
エンキとエンリルは互いに立腹している。
- C₁ 44 [it]ṭarduninni ina []
彼らはわたしを [わたしの家?] から引きずり出した。
- C₁ 45 [iṣ]tuma aptana[llahu ^dEnki]
わたしが常々 [エンキを崇] 敬するので、

7 洪水を含意する。

8 ギルガメシュ叙事詩 第11の書板44行を参照。See, Lambert/Millard
159. 月本昭男『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店、1996年、138頁注13参照。

9 直訳は「あなたたちの神と一致しない」。

- C₁ 46 [aw]ātam anni[tam iqbi]
 [彼はわたしに] 事の(次第について) [話したのだ。]
- C₁ 47 [ul] uššab ina š[a- ku-nu¹⁰]
 わたしは(もはや) [あなたがたの……] に住まうことはでき
 [ない。]
- C₁ 48 [ina] eršet 𒂗Enki ul [ašakakan šēpija]
 わたしはエンリルの地域 [にわたしの足を置くことは] でき
 ない。
- C₁ 49 [it]ti ilu x []
 [わたしはアプスーに向かって下って行って、
 (わたしの) 神と共に留まらなければならない¹¹。]
- C₁ 50 [annita]m iqbia a[m]
 [これが] 彼がわたしに話したことなのだ。」
- 以下この欄の終わりにかけて4-5行の欠損が認められる。

第2欄

初頭の9行は欠損していて翻字・翻訳はできない。

- C₂ 10 šibu[tum]
 長老たち []
- C₂ 11 nagā[ru naši pāssu]¹²
 大 [工¹³ は彼の斧を運んだ。]
- C₂ 12 atkuppū naši abanšu

10 ku-nu の文字が読み取れる。Lambert/Millard では欠字とされる。

11 Dally による補充訳に従った。30 頁参照。

12 ギルガメシュ叙事詩 第11の書板50-55行を参照。See, Lambert/Millard 160.

13 nagāru と12行目の atkuppū は舟の建造にかかわる職種である。

葦細工人は彼の石¹⁴を [運んだ。]

C₂ 13 kupra [ittašu šerru]

[子ども] は瀝青を [運んだ。]

C₂ 14 lapnu hišhta ūbla

貧しい者は [必需品を持ち込んだ。]

テキストは 18 行目にアトラ・ハシースを読みとれるが、15 から 21 行にわたって粘土版左端にわずかな文字が残る程度である。

C₁ 28 me? []

C₁ 29 ubb[al]

C₁ 30 mimmma i[šû]
なんでもそこにあった []

C₁ 31 mimma i[šû]
なんでもそこにあった []

C₁ 32 elluti it-[]
淨いもの []¹⁵

C₁ 33 kabrūti []-ri
肥えたもの []

C₁ 34 ibiru[ma] [uštēr]ib
彼は選別し、(舟に) 持ち込ませた。

C₁ 35 muppa[ruša iṣṣur] šamaij
大空をまう翼を広げた [鳥,]

C₁ 36 bū[lu] x -ka-an
[シャ] カン¹⁶ の牛, []

14 細工を施すために使用される道具。葦を細工するには適当な長さに揃え切るナイフと葦を細工し易いように平らにする石が必要とされた。

15 きよいもの、33 行目の肥えたものは動物を指す。

16 シュメール語 Šakan/Šakkan。アッカド語テキストには Emesal の変種 Sumuqan として出てくる。神格化され四足歩行獣、とりわけ牛を飼育する草

- C₁ 37 na[masê] x šēri
野獣たち，草原の []
- C₁ 38 [uš]tērib
[] 彼は（舟に）持ち込ませた。
- C₁ 39 [] ibbabil arhu
[] 月は消え失せた。
- C₁ 40 [] nišišu iqri
[] 彼は彼の民を招いた。
- C₁ 41 [] ana qerēti
宴会に []
- C₁ 42 [] kimatašu uštērib
[] 彼は彼の家族を乗り込ませた。
- C₁ 43 [ākir]ū ikkal 44 šātū išatti
彼らは [食し，] [飲] んでいた。
- C₁ 45 irrub u ušši 46 ul uššab ulikammis
彼は入ったり，出たりした。彼は座ることも，跪くこともできなかった。
- C₁ 47 hepīma libbaš imā'martam
彼の心臓は破れ，胆汁を吐いた。
- C₁ 48 ūmi išnū pānuš
空の様子¹⁷が変わり，
- C₁ 49 ištagna ^dAdad ina erpeti
アダドは雲間に唸り声をあげた。

原を体現する。冥界の神としても登場する(Cf. シュメール語による一連のギルガメシュ物語 “ギルガメシュの死”)。冥界との関係は荒野を冥界の入り口とするバビロニアの冥界観に由来するかもしれない。

17 原意は「顔」。

- C₁ 50 ila¹⁸ išmu rigmšu
 彼 (アトラ・ハシース) は彼 (アダド) の声を聴いたとき,
- C₁ 51 [ku]pru babil ippehi bābšu
 瀝青が持ち込まれ、彼は彼の扉を閉じた。
- C₁ 52 ištuma idilu bābšu
 彼の扉に門をかけると,
- C₁ 53 ^dAdad išaggum ina erpeti
 アダドは雲間に唸り声をあげていた。
- C₁ 54 šārū uzzuzu ina tebišu
 彼が立ち上がると、風¹⁹ は荒れ狂い続けた。
- C₁ 55 ipru' markasa eleppa iptur
 彼は綱を断ちきり、彼は舟を解き放った。

第3欄

最初の6行はほぼ欠損していて欄の右側の文字を多少判読できる程度である。

- C₁ 7 [^dAnzu ina š]uprišu
 [アンズー (鳥) はそ] の爪で,
- C₁ 8 [ušarriṭ] šamai
 天空²⁰ を [引き裂いていた。]
- C₁ 9 [m]ātam
 [] 土地
- C₁ 10 [kīma karpati ri]gimša ihpī

18 ila Lambert/Millard は「～するやいなや」と訳出する。

19 複数で表される。様々な風を意味する。

20 古代メソポタミア人は、天は複数の層から構成されている、と考えていた。
 聖書の記述にも見られる。Cf. 創世記 1:1。

その騒音を彼は²¹ [(粘土製) の壺のように]²² 粉碎した。

- C₁ 11 [ittaṣâ] abūbu
[] 洪水が [始まった。]
- C₁ 12 [kīma qabl]i eli niši ibā' kašūšu
戦闘のように、人々の上をカシューシュ-武器²³ が進んだ。
- C₁ 13 [ul] imur ahu ahašu
誰一人他の人を見ることが [できなかった。]
- C₁ 14 [ul] utēddû ina karaši
破滅のさなか彼らは気づきは [しなかった。]
- C₁ 15 [abūb]u kīma lī išabbu
[洪水] は牡牛のように大声をあげた。
- C₁ 16 [kīma p]ari naeri 17 [-ni]m šārū
いなく野生の驢馬 [のように] 風は [唸り声をあげた。]
- C₁ 18 [šapat eṭ]utu ⁴Šamaš laššu
[暗闇が] 厚く覆い、太陽はなくなった。
- C₁ 19 [] x-šu kīma ṣuppi
[] 白い羊²⁴ のように、
- C₁ 20 [] abūbi
[] 洪水の
- C₁ 21 []
- C₁ 22 []
- C₁ 23 [] rigim a [būb]i

21 アダトかアンズー鳥であるが、いずれであるかテキストからは不明。

22 Lambert/Millard による補充訳。

Cf. ギルガメシュ叙事詩 11 の書板 107 行。

[] 大地は [壺] のように壊れた。

23 kašūšu 破滅をもたらす武器。洪水を象徴する。Cf. CAD K296b。

24 Dally 訳に従った。白い羊とは犠牲の羊の意味であろう。44 行を参照せよ

- [] [洪] 水の轟
- C₁ 24 []-bi ilī uštakan
神々の [] を示された。
- C₁ 25 [^dEnki? i] štani ṭēmš
エンキはもくろみを変えた。
- C₁ 26 [x] mārūkšu ubbukū 27 [an]a mahrišu
彼の息子たちは追い払われた, 彼の面前で。
- C₁ 28 [^dNi]ntu bēltum rabītum
偉大なる婦人ニントゥは
- C₁ 29 [pul]hita ukallā šaptāša
その唇は [霜]²⁵ のような皮で覆われていた。
- C₁ 30 ^dAnunna ilu rabūtum
偉大なる神々アヌンナキは
- C₁ 31 [waš]b[u] ina šūmi u bubuti
渇き飢えて座っていた。
- C₁ 32 imurma iltum ibbak[i]
女神は見て涙した。
- C₁ 33 tabsūt ilī erišta ^dMami
神々の産婆, 賢いマミは²⁶ (言った)。
- C₁ 34 ūmur lidda[im]
「昼を暗くさせよう。
- C₁ 35 litūr likil
向きを変えて, 暗くしよう。
- C₁ 36 anāku ina puhri ša ilī
わたしが, 神々の集会で

25 Dally の訳注 37 参照。

26 しばしば施される修辞法で, 前文の主語は後置文において明示される。32 行目の女神は 23 行においてマミであると特定される。

- C₁ 37 kī aq[bi] 38 ittišunu gamerta[m]
どうして命じることができたでしょうか、彼らとともに全滅を。
- C₁ 39 ʔEnlil idpira ušaqbi bi[ša]
エンリルはやり過ぎて、悪しき命令を下した。
- C₁ 40 kīma Tiruru²⁷ šuāti 41 ušashi biš[a]
あのティルルのように、彼は悪しきことを持ち出した。
- C₁ 42 ana ramanija u pagrija
わたし自身に向けられ、またわたしの体に向けられ
- C₁ 43 ina šerijama rigmišina ešme
わたしに対抗する彼らの喧騒にわたしは耳を傾けた。
- C₁ 44 elēnuja kīma šuppi 45 iwu lillidu
わたしから離れて、白い羊のように、わたしの子孫はなってしまった。
- C₁ 46 u anāku kī ašābi 47 ina bīt dammati sahur rigmī
わたしについては嘆きの家に住んでいるかのように、わたしの叫びは静かになった。
- C₁ 48 etellima ana šamai
わたしは天に昇って行って、
- C₁ 49 tūša wašbāku 50 ina bīt nakkamati
あたかも住まうかのようだ、宝物の館に。
- C₁ 51 ēša Anu illikam bēl ṭemi
告知の主アヌはどこへ行ってしまったのか。
- C₁ 52 ilū mārūšu išmû zikiršu
(どの) 彼の息子たちの神々が彼の命に服したのか。
- C₁ 53 ša la imtalkuma iškunu a[būbu]

27 悪鬼の一種か。

熟慮しなかった者(アヌ)はただ洪水をもたらせた。

C₁ 54 niši ikmišu ana ka[raši]

人々を絶滅へ向けて集めた [者],

この欄の最後の一行は残念ながら欠損していて解読不可である。

4 欄

最初の3行は欠文である。

C₁ 4 unabba ^dN[intu] []

ニ [ントゥ] は嘆き悲しんでいた。[]

C₁ 5 abuman uldā g[allata] 6 tāmta kīma kulili

『実父?がうねる²⁸

海を産んだ(ことで)

蜻蛉たちのように²⁹

C₁ 7 imlānim nāram

彼らは河をいっぱいにしたのだろうか。

C₁ 8 kīma anim īmida ana s[apani]

筏のように彼らは低地に寄りかかった。

C₁ 9 kīma anim ina šēri īmid ana kibri

平原の筏のように彼らは堤に寄りかかった³⁰。

C₁ 10 amurma elišna abki

わたしは見て、彼らを悲しんで泣いた。

C₁ 11 uqatti dimmati ina šērišin

わたしは(もう)彼らのために嘆き尽きはてました。」

28 海を形容する語句 gallu/gallatu

29 kuliluは魚人間をも意味するが、ここでは蜻蛉と解するべきであろう。ギルガメシュ叙事詩 第10の書板 第6欄のウトゥナピシュティムのことばに蜻蛉たちへの言及がある。

29 いつかは、川が増水し、洪水をもたらす。

30 蜻蛉たちは川面を流れる。Dally 注41参照。

30 8-9行の描写は筏のように河を下る様を表現したように思われる。

- C₁ 12 ibkima libbša unappiš
彼女は泣いて、心を落ち着かせた。
- C₁ 13 unabba 𐎠Nintu 14 lalāšu išrup
ニントゥは 悲しんで、 彼女の感情を吐き出した³¹。
- C₁ 15 ilū ittiša ibku ana mātim
神々は彼女と共に国土のために泣いた。
- C₁ 16 išbi nissatam 17 šamiat šikriš
彼女は悲しみに飽き、 乾のためビールを切に願った。
- C₁ 18 ši ašar ūšib ina bikīt 19 ūšbuma kīma immeri
彼女が悲しんで座っているところに、(偉大なる神々も) 羊の
ように座っていた。
- C₁ 20 imlûnim rāṭam
彼らは喉笛で満たした³²。
- C₁ 21 šamia šaptāšunu³³ bulhīta
彼らの唇は熱で乾き、
- C₁ 22 ina bubūti 23 itanarrarrū³⁴
餓えのために 恐怖に囚われた。
- C₁ 24 7 ūmi 7 mušiatim³⁵
7日7晩のあいだ
- C₁ 25 ilik rādu mehû [abūbu]
氾濫と嵐、[洪水] がやってきた。

26行から48行まで右側辺に多少の文字を判読できるが、ほぼ欠損してい

31 šarāpu 「焼き焦がす」が原義。

32 rāṭu の原意はパイプ、とりわけ灌漑用に使われる。金属製のパイプの用例としてもでてくる。

33 第3欄29行参照。

34 arāru の Gtn 形。

35 Cf. ギルガメシュ叙事詩 第11の書板 127行。

るため判読は不可能である。この欄の終わりにかけて、さらに 5-6 行にわたる欠文が認められる。

第 5 欄

この欄のテキストは始めの 29 行ほど欠損している。

- C₁ 30 ana šār[ī]
 風に []
- C₁ 31 [i]ttadi []
 彼は [] 置いて、
- C₁ 32 izannun []
 彼は食べ物を与え、 []
- C₁ 33 []
 []
- C₁ 34 [iṣinu i]lū ereša
 神々は香りを [嗅ぎ、]
- C₁ 35 [kīma zubbi] elu niqī pahru
 [蠅のように] 供物の上に集った。
- C₁ 36 ištum]a ikulu niqiam
 彼らは供物を食べ終わると、
- C₁ 37 [^dNin]tu itbêma
 ニントゥは立ちあがり、
- C₁ 38 napharšunu uttazzam
 彼ら全てに不平を言った。
- C₁ 39 êša Anu illikam³⁶ 40 bēl ṭēmi
 「告知の主 (40) アヌはどこに行かれたのだろうか。」
- C₁ 41 ^dEnlil iṭhia ana qutrīni

36 Cf. ギルガメシュ叙事詩 第 11 の書板 167-169 行。

エンリルは焼香に行かれたのだろうか。

- C₁ 42 ša la imtalkuma iškunu abūbu
熟慮せず、洪水をもたらした彼らは
- C₁ 43 niši ikmisu ana karašī
人々を破滅へ向けて集めた³⁷。
- C₁ 44 ublā pikunu gamertam
あなたは³⁸ 絶滅をもたらせた。
- C₁ 45 ellutu[m] z[i]mūšina i'adru
光り輝く彼らの顔つきは暗くなった。」
- C₁ 46 u šī iṭhema ana sube rabūti³⁹
そして彼女は [アヌが造り、………した (47 行)] 大蠅⁴⁰ ども
に近づいた。
- C₁ 47 ša Anu i<pu>šuma [ipanqalu/al⁴¹]
- C₁ 48 jattum nissasu
「彼の悲しみはわたしのものでもあるのです。
- C₁ 49 lū šīmti ib[ā]
わたしの運命をお定めください。

37 42-43 行は C₁ 5 欄 53-54 と並行する。

38 直訳では「あなたの口」となる。

39 この行より 6 欄 6 行まで物語としてギルガメシュ叙事詩 第 11 の書板 162-165 と対応する。

40 蠅の象徴的意味については明らかではない。蠅の象徴については Dally の脚注 42 を参照。いずれにせよ人間の死や都市の崩壊と関係づけられるか。See, A. D. Kilmer, “The symbolism of flies in the Mesopotamian flood myth and some further implications,” in *Language, Literature, and History: philological and historical studies presented to E. Reiner*, ed., F. Rochberg-Halton, New Haven, 1987, 175-180.

41 この行における後半部分は語根の取り方にもよるが理解し難い。Lambert/Millard は語根を paqālu 「運ぶ」と取るが, pagālu 「強い」とも読める。

- C₁ 50 lišēšānnima ina nelmēni
 彼 (アヌ) はわたしを災いから解放し、
 C₁ 51 pānija lipt[e]
 わたしを楽しくさせてくれよう⁴²。

最後の2行は欠字・欠損が多く翻字・翻訳は難しい。

6 欄

- C₁ 1 ina ma-x […]
 C₁ 2 zubbu a[nnūtum] 3 lū uqnī kišādij[ama]
 これらの蠅を、 わたしのラピス・ラズリの
 ネックレス⁴³にして下さい。
 C₁ 4 luhsussu ūmi [] zi []
 (それによって) 日ごと (?) [そして永遠に (?)] わたしが
 それを憶えることができますように。
 C₁ 5 maqūra itamar q[urdu ^dEnlil]
 戦 [士エンリルは] 船⁴⁴を見て、
 C₁ 6 libbāti malī ša ^dIgigi
 イギギに対する怒りでいっぱいだった。
 C₁ 7 rabūtum ^dAnunna kalūn[i]
 「わたしたち、大いなるアヌンナキ、は皆
 C₁ 8 ūblā pīni ištīniš māmītam
 ともどもに誓って一致した。
 C₁ 9 ajanu ūši napištum
 どこに命は行ってしまったのか。

42 直訳では「私の顔を開かせよう」

43 「首の周りのラピス・ラズリ (瑠璃)」が直訳。蠅の形状をしたラピス・ラズリ ビーズは知られている。注 40 を参照せよ。

44 祭儀の際の行進船。半月と満月の中間の形状をなす。Dally 注 43 参照。

- C₁ 10 kī ibluṭ awīlum ina karāši
 どうして人間は絶滅から生き残ったのだろうか。」
- C₁ 11 Anu piašu ipušamma
 アヌは口を開いて、
- C₁ 12 izzakar ana qurādi ⁴Enlil
 戦士エンリルに言った。
- C₁ 13 mannu annitam 14 ša la ⁴Enki ippuš
 「誰がこのことを エンキ以外にするだろうか。
- C₁ 15 [x x] ul? ušapta zikra
 [] わたしは命令を明かしはしなかった。」
- C₁ 16 [⁴Enki] piašu ipušamma
 エンキは口を開き、
- C₁ 17 [izzakar] ana ilī rabūti
 大いなる神々に言った。
- C₁ 18 [lū ē]puš ina pānikun
 「[まことに] あなたの方の前で、わたしがそれをしたのです。
- C₁ 19 [ušt]ašira napi[štam] []
 わたしは確かに命を守らせました。[]
- 以下 5 行にわたり欠字・欠損が多く翻字・翻訳は不可である。
- C₁ 20 [] i[lī? ... x bi?]
 [] 神々 [] []
- C₁ 21 [a-b]ūbu
 [洪] 水
- C₁ 22 [] x-kun
 [] []
- C₁ 23 [l]ibbaka
 [] あなたの心
- C₁ 24 [] u rummi
 [] そして緩めた

- C₁ 25 [bel arn]im šukun šēretka
「あなたの罰を [罪びとに強い,]
- C₁ 26 [u] ajû ša uša[s]saku awātka
[そして] あなたのご命令に背く⁴⁵ ものは誰でも,
- C₁ 27 []-nu puhra []
[] 集会 []
- これよりテキストは 10 行ほど欠損している。
- C₁ 38 [] x šiāti
[] 彼女の/それ
- C₁ 39 [] iškunu
[] 彼/彼女/彼らは置いた。
- C₁ 40 [unapp]iš libbi
[わたしは] 心を和 [ませた。]
- C₁ 41 [^dEnlil p]iašu ipušamma
[エンリル] は口を開いて,
- C₁ 42 [izza]kar ana ^dEnki niššiki
思慮深いエンキに言 [った。]
- C₁ 43 [gana sa]ssūra ^dNintu šisīma
「[さあ, 誕] 生の女神ニントゥを呼び出しなさい。
- C₁ 44 [att]ā u ši mitlika ina puhri
あなたと彼女が集会において互いに協議しなさい。」
- C₁ 45 [^dEnki p]iašu ipušamma
[エンキは] 口を開いて,
- C₁ 46 [izzakar] ana ^dNintu sassūri
誕生の女神ニントゥに言った。
- C₁ 47 [attī sa]ssūru baniat šimāti

45 原義の語根は nasāku の Š 形で「取り除く」。

C₁ 1 [a]ppūna šaluštum li[b]ši ina niši
加えて、人々のうちに第3の群⁴⁶をあらしめよ。

C₁ 2 ina niši ālittumma lā ālittum
人々の中に子を生む女と子を産まない女とを（あらしめよ）。

C₁ 3 libiṣima ina niši pāšittu⁴⁷
パーシットゥ悪鬼を人々の中にあらしめよ。

C₁ 4 liṣbat šerra 5 ina birkū āliti
子を奪い去るため それ（子）を産んだ彼女の膝から

C₁ 6 šukuni ugbattāti eneti 7 u egiṣiati
ウグバブトゥ女祭司たち、エントゥ女祭司たち、とエギツィ
トゥ女祭司たち⁴⁸を任命しなさい。

C₁ 8 lū ikkibu šinama 9 aladam pursi

— 60 —

彼女たちはタブーとなりましょう。(そして)子の誕生は断ち
切られましょう。」

10 [x x]ni š[i?] x x x-tam

[]

C₁ 11 [] u [na-pi]-iš-tam

[] と生命 [?]

以下この欄の終わりまで 24 行にわたり側面に多少の文字は識別できるもののほぼ欠損か欠文である。

第 8 欄

テキストは初頭の 8 行がほぼ欠損する。

C₁ 9 kīma nišuku[nu abūb]a

わたしたちは [洪水] をもたらしたが、

C₁ 10 awīlum ibluṭ[u ina karāši]

人間は絶滅から生き残った。

C₁ 11 attā mālik il[ī rabūti]

あなたは [大いなる神] 々の顧問官だ。

C₁ 12 tēretiš[ka] 13 ušabši qabla

あなたのご命令で わたしは戦闘を惹き起した。

C₁ 14 šanittiš[ka] 15 anniam zam[ra]

[あなた] を讃えるために この歌を

C₁ 16 lišmūma ^dIgigi 17 lišširu narbika

イギギに聞かせよう。 彼らにあなたの偉大さを褒め

たたえさせよう。

C₁ 18 abūba ana kullat niši 19 uzammer

全ての人々に洪水について わたしは歌いましょう。

šimea

お聴きなさい！

奥付として第3の書板の終了とこの叙事詩のタイトル『神が人間であった時』が記され、叙事詩は1245行から構成されていること、イピック・アヤ (Ipiq-Aya) なる2等書記官の手によってアミ・ツァドゥカ (Ammi-ṣaduqa) が王であったアッヤル月 [] 日に書かれたこと等が残される。

PLATE 501

ATRAHASIS

3, BM 78942

+78971

+80385

III i

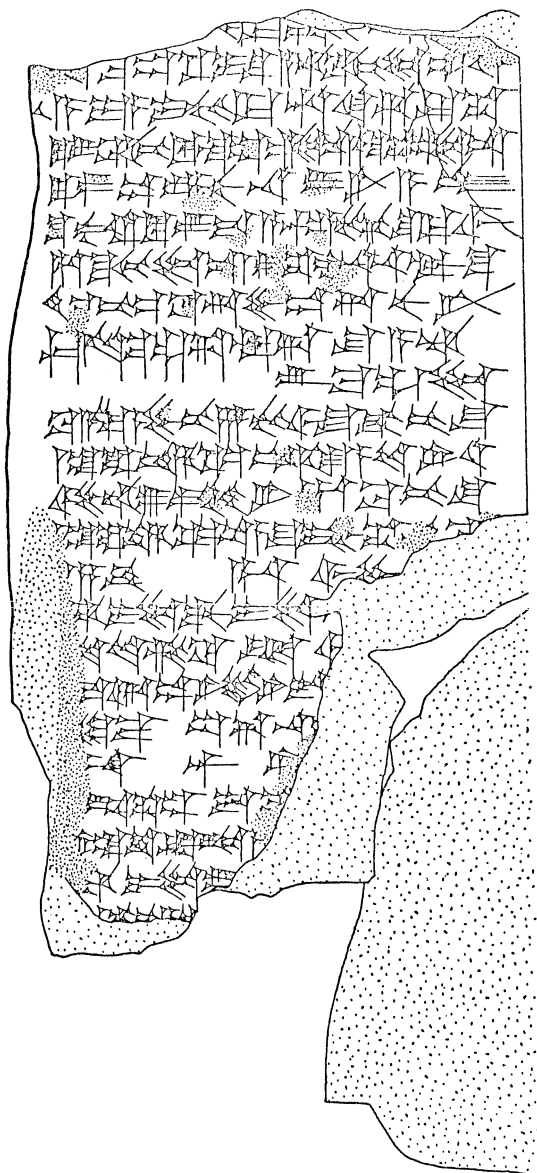
30

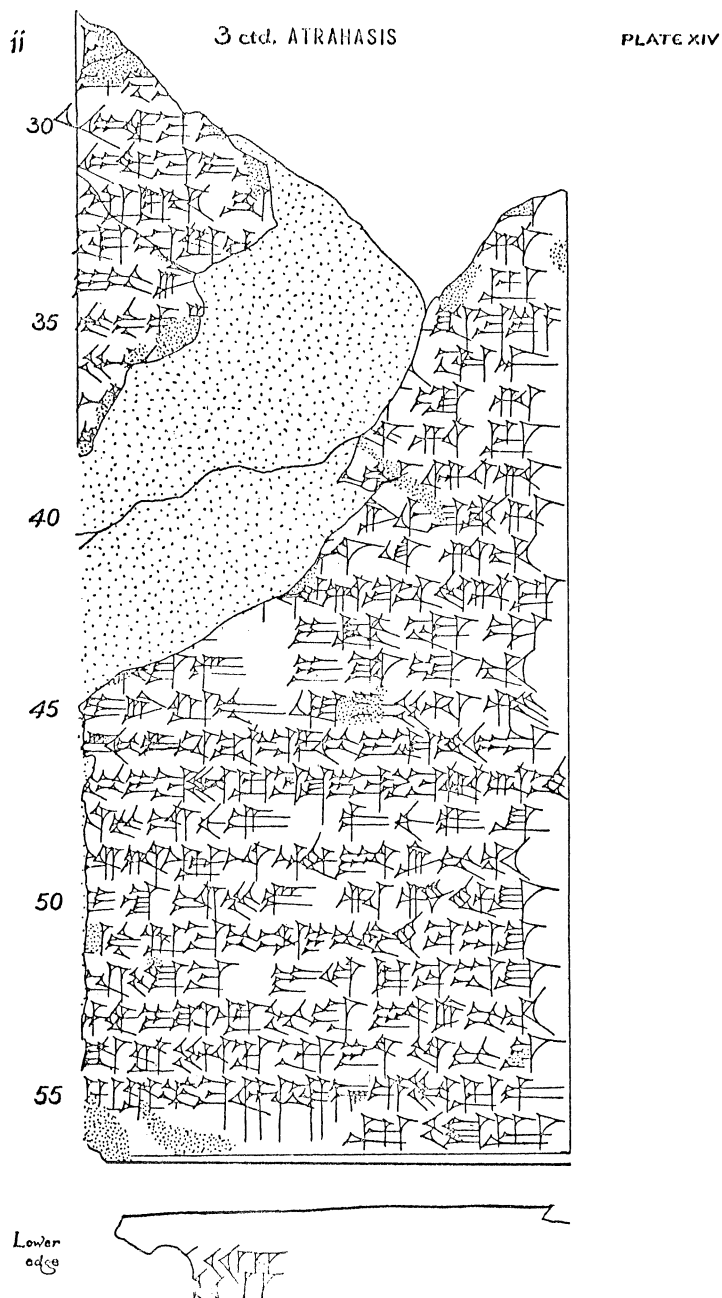
35

40

45

50





3rd ed. ATRAHASIS

PLATE XV

iii 5

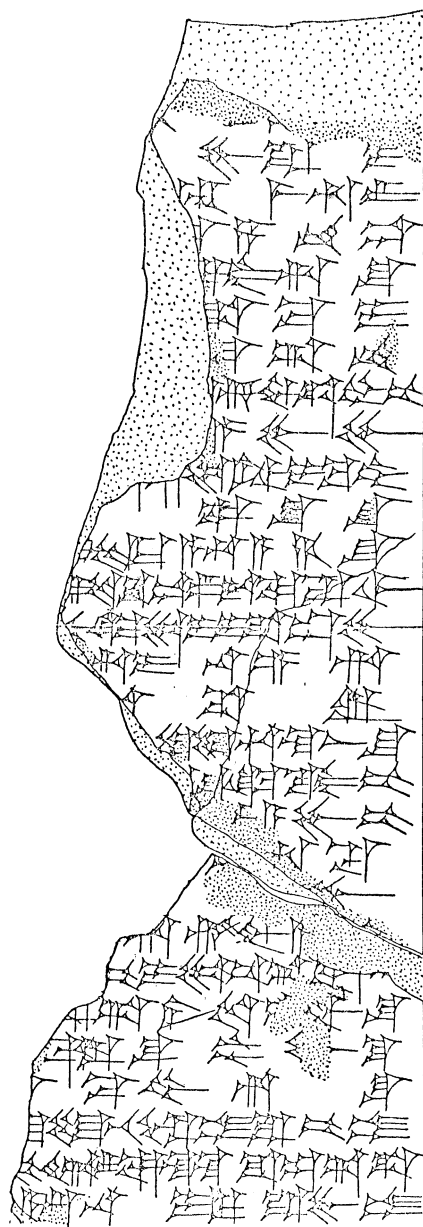
10

15

20

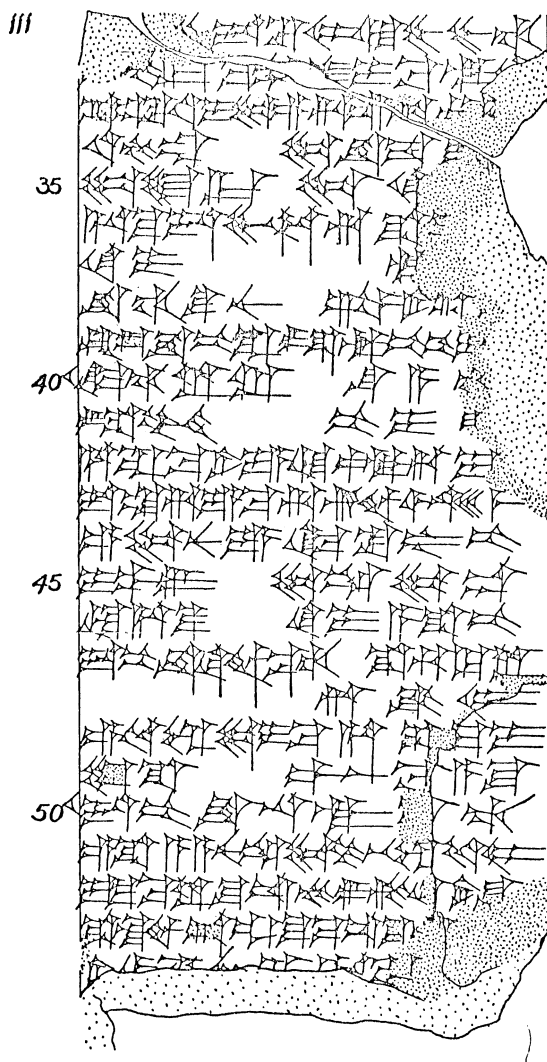
25

30



3 ctd. ATRAHASIS

PLATE XXV

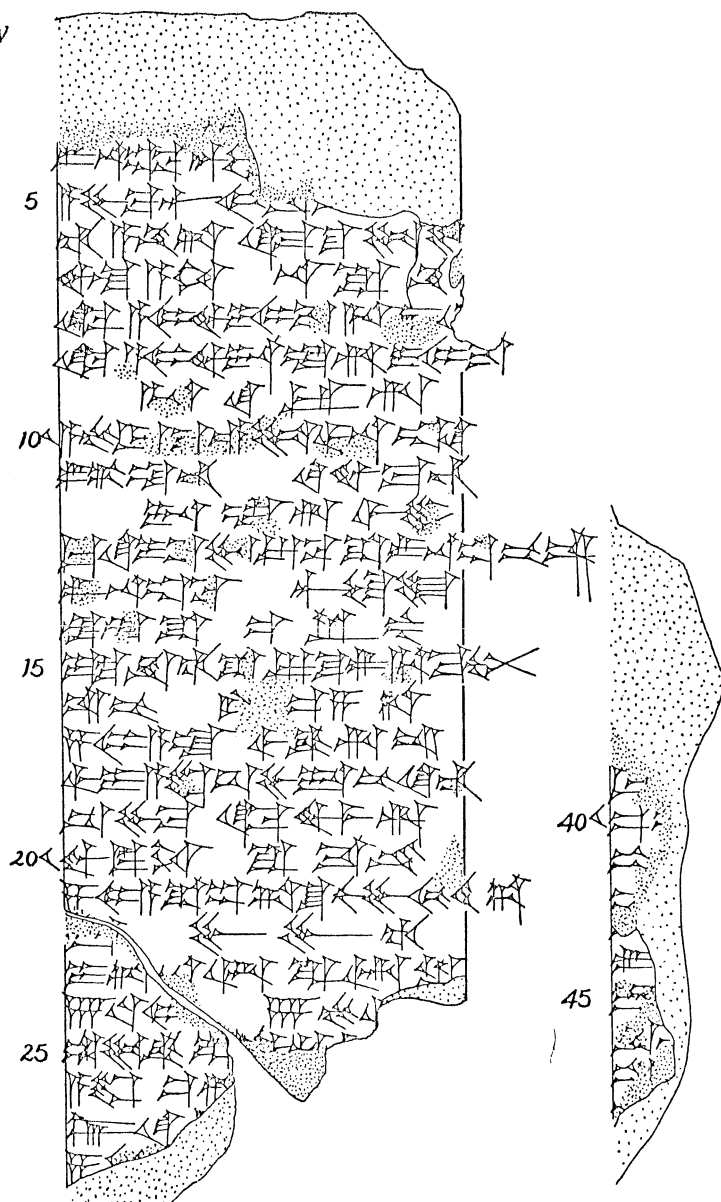


Lower
edge

3rd. ATRAHASIS

PLATE XVII

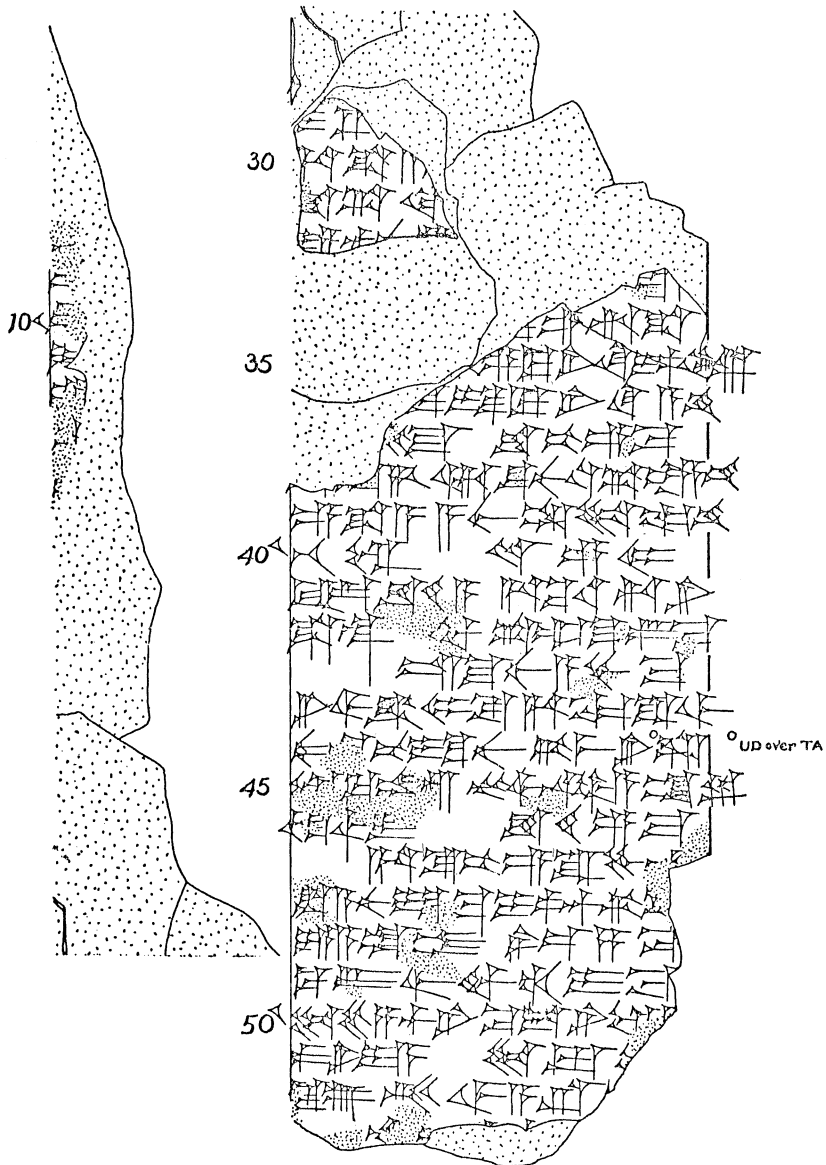
iv



3 ctd. ATRAHASIS

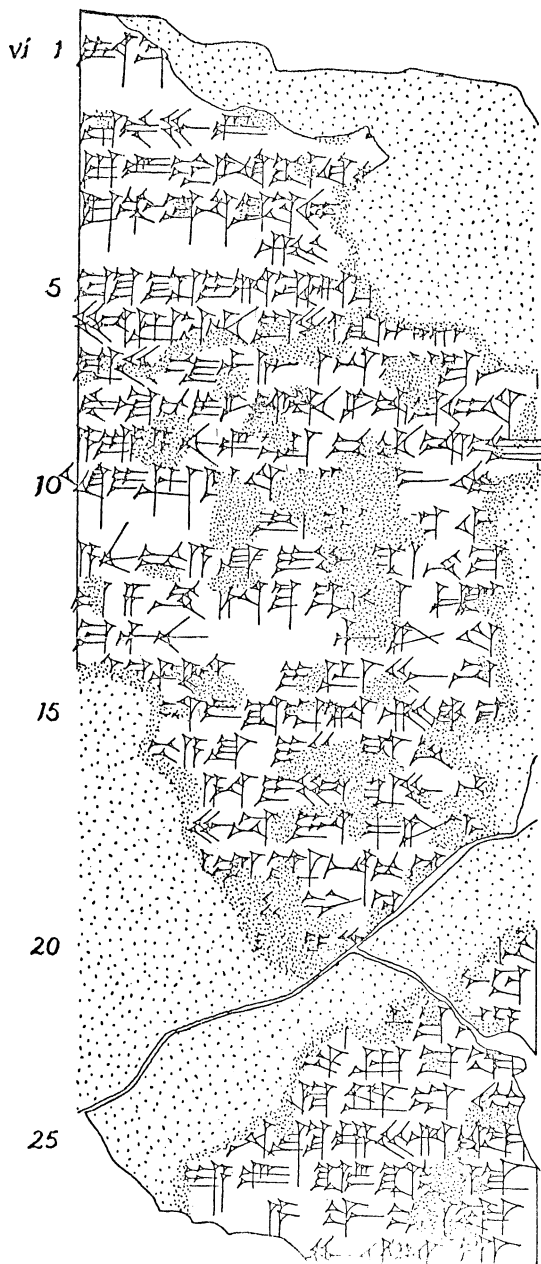
PLATE XVIII

v



3 ctd. ATRAHASIS

PLATE XIX



3ctd. ATRAHASIS

PLATE XX

vi

40¹

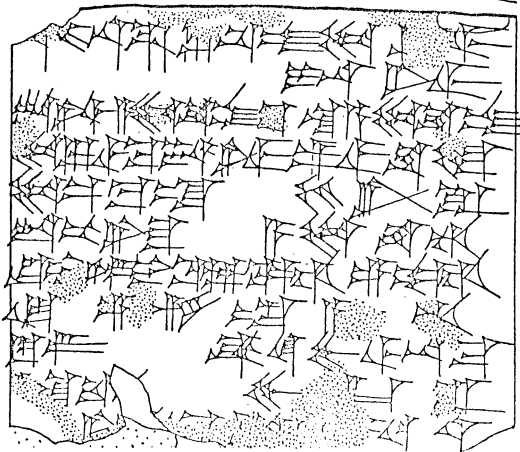
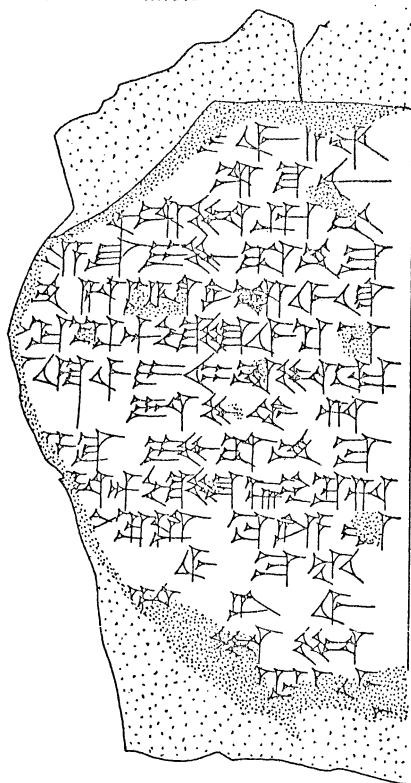
45

50

vii 1

5

10



3 ctd. ATRAHASIS

PLATE XXI

